中世平泉の建物軸方向の特徴からみた市街地形態に関する一考察

A STUDY ON THE URBAN FORM FROM THE VIEWPOINT OF THE CHARACTERISTIC OF BUILDING'S AXIS IN MEDIEVAL 'HIRAIZUMI', JAPAN

磯野 綾*, 土久菜穂**, 山本 明***
Aya ISONO, Naho DOKYU and Akira YAMAMOTO

The purpose of this paper is to get the basic knowledge of 'Hiraizumi' town, one of the medieval central city in Japan, from the four indexes of building's axis which explained to relation between building's axis, contour line, surrounding mountain landscape, streets and north-south's axis.

As a result, three conclusions were found. The first is that many buildings are not parallel to the streets. The second, there is little possibility of agreement with top of the mountains. The last, there is urban infrastructure like 'Jobo' urban system around Motsu-ji, on the other hand not like it in Yanaginogoshi. Therefore the Osyu Fujiwara family did no more than develop the blocks, and many buildings are supposed to be arranged according to owner's idea.

Keywords: *Hiraizumi, Urban form, Building's axis, Contour line, Street's axis*

平泉, 市街地形態, 建物軸, 等高線, 道路軸

1. 研究の背景と目的

中世平泉は平安京(条坊制都市)との類似性¹⁾が示唆される一方、平安京の正方位の道路軸とは異なる道路軸が抽出されている。また平泉各地の発掘調査のほとんどが道路等の建設工事の事前に行われる緊急発掘調査のため発掘箇所も断片的なものに止まることから、建物の配置等についてはまだ不明な点が多い。

前稿²⁾では中世平泉の市街地の形成について、市街地内の道路ならびに9施設(柳之御所、花立廃寺、観自在王院、毛越寺、祇園遺跡、伽羅御所跡、無量光院、衣関遺跡、泰衡・国衡館跡)の道路軸と建物軸および周辺山稜景観の関連性について以下の知見が得られた。

- (1) 建物軸線と多くの道路軸線間との間に平行性は保たれていない。
- (2) 複数の道路軸ビスタ内に山頂・峠が存在し、特に正方位軸は観音山又は東岳峠に、また第2軸^{注1)}は観音山に集中する。

一方、建物が建てられるときの向きは、日照・採光面からの南向き(正方位)の場合のほか、敷地が接する道路の向きや敷地周辺地形(傾斜線の向き)および周辺景観(借景)など様々な要因があり、

それらとの関連性については、未知の研究課題であった。

そこで本稿は建物周辺の地形、周辺景観、道路、正方位に関する4指標を設定し、それらを基に平泉の建物軸方向の特徴を把握した上で、中世平泉の都市形成に対する奥州藤原氏の支配力および市街地の形態に表われる中央性または属地性の有無について新たな知見を得ることを目的としている。

2. 研究の方法

(1) 研究対象地区および資料

①研究対象：関山、金鶏山、太田川、北上川に囲まれた平泉市街地内で、発掘調査にて検出された礎石建物および掘立柱建物のうち、発掘調査報告書にて12世紀に属する可能性が示唆された建物遺構(204棟)を対象とした^{注2)}。(図1、表1参照)

②研究資料

I) 発掘調査報告書

建物・道路遺構情報(遺構の検出場所、建物規模、道路幅員、道路・建物軸方向、建設時期など)の抽出。

本稿は第8回平泉文化フォーラム(2008.2.2)で行われた平泉文化共同研究発表の内容を加筆・再構成したものである。

* 千葉工業大学大学院工学研究科工学専攻

博士後期課程 工修

** 浦安市都市整備部 博士(工学)

*** 千葉工業大学工学部建築都市環境学科 教授・工博

Graduate Student, Dept. of Architecture and Civil Engineering, Faculty of Engineering, Chiba Institute of Technology, M. Eng.

Urayasu Municipal Office, Dr. Eng.

Prof. Dept. of Architecture and Civil Engineering, Faculty of Engineering, Chiba Institute of Technology, Dr. Eng.

1. 平泉町教育委員会『岩手県平泉町文化財調査報告書』 計26集,1985～2006年
2. 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書』 計4集,1997～2001年

II) 地図資料

建物・道路遺構の分布図、配置図の作成などに使用。

3. 1:25000 地形図『陸中江刺』『南西』『一ノ関』,2003年
4. 1:2500 都市計画図『泉ヶ城』『中尊寺』『柳之御所』『日照田』『祇園』,1979～1991年

III) 実測および写真資料

都市計画図(1:2500)上で確認できるのは現存する建築物に限られ、また発掘調査報告書に記載されている礎石位置および建物軸方向(図2)の表記方法が不揃いであることから、本研究では礎石が地上に露出しているものはGPS^{注3)}をデジタルカメラ^{注4)}に接続して撮影を行い^{注5)}撮影地点(建物の礎石位置)の緯度、経度^{注6)}、高度、建物軸方向および撮影時刻等の数値情報と写真による周辺景観の同時記録結果をもって研究資料とした。なお礎石が地上に露出していないものは発掘調査報告書を基礎資料とした。

(2) 建物軸に関する分析指標の設定

発掘調査報告書では建物の桁行きあるいは梁間柱列がなす直線を「建物軸」としているが、本稿では当時の建物正面の向きの多くが梁間方向であった点を考慮して梁間柱列の直線を「建物軸」とする(図2)^{注7)}。

建物軸方向の特徴を示す指標として、以下の四指標を設定した。建物軸方向は、礎石が地上に露出しているものはGPS測量により、掘立柱建物など地上に柱跡が露出していないものは発掘調査報告書を基礎資料とした。また、発掘調査報告書にも建物軸方向の記載がないものについては、都市計画図(1:2500)上にプロットされた建物遺構図を用いて建物軸方向を抽出した。

①等高線偏角(図3)

地形に沿って建物等を建設する場合、土地の造成等の労力が少なく済む利点がある。平泉の市街地は西に位置する山稜から東の北上川近辺の平地へと向かい、緩やかに傾斜しており、藤島氏も柳之御所周辺の道路は地形に沿って建設されたと述べている³⁾。

そこで、本稿では立地点の地形(等高線)と建物の平行性に着目し、建物の立地場所に直近する等高線を用いて最大傾斜線と建物軸方向線との偏角を「等高線偏角」として以下の手順で求める。

1) 建物跡の外接円を引く。2) 国土地理院作成の地形図(縮尺1/2500)をもとに、等高線と外接円が交差する二点間を直線で結び、その直線に垂線を引く。3) 垂線と建物軸方向との角度を『等高線偏角』とする。

②視線偏角(図4)

古代・中世の日本の集落や都市は、自然を畏怖および崇拝の対象として土地と建物の調和に配慮し形成されたとする説もあり⁴⁾、重要施設の配置と周辺地形の位置との関連性を示す先行研究がある^{5)・6)}。特に目標物となりやすい「山」は、山岳信仰、方位信仰等と結び付き、集落周辺の景観の中でも重視された対象の一つであ

図1 平泉周辺山頂と施設分布

施設記号

- I) 政庁: A 柳之御所(当時の政庁)
 II) 宗教建築: B 中尊寺 C 衣閣(北方鎮守) D 花立庵寺 E 白山社(中央鎮守)
 F 無量光院 G 毛越寺 H 観自在王院 I 祇園(南方鎮守)
 III) 住居: A 柳之御所 J 伽藍之御所 K 泰衡・国衡の館
 山頂記号: a 音羽山 b 経塚山 c 駒形山 d 東輪山 e 東岳山 f 観音山
 g 兎島ヶ森 h 石蔵山 i 高館 j 関山 k 金鶏山 l 鈴懸の森 m 鏡山

表1 平泉主要施設

建物記号	施設の特徴	北緯	東経
A	当時の政庁・奥州藤原氏の居館	38°59' 37.3"	141°07' 10.6"
B	関山山腹。山地伽藍の寺。	39°00' 05.0"	141°06' 60.0"
C	関山南山麓の高台。平泉鎮守社のひとつといわれる。	38°59' 50.5"	141°06' 22.7"
D	金鶏山東山麓の高台にある大規模建物。用途不明。	38°59' 32.2"	141°06' 40.0"
E	平泉鎮守社のひとつといわれる。	38°59' 25.2"	141°06' 55.4"
F	浄土庭園景観を有した寺院。	38°59' 34.3"	141°06' 56.5"
G	塔山南東山麓。浄土伽藍を有する寺院。	38°59' 19.5"	141°06' 27.3"
H	毛越寺東側に隣接して建つ。	38°59' 21.5"	141°06' 36.9"
I	平地。市街地よりやや南に離れている。	38°58' 37.6"	141°06' 57.8"
J	藤原秀衡居館。	38°59' 07.8"	141°08' 52.1"

図2 建物軸および軸方向の定義

図3 等高線偏角の測定法

図4 視線偏角の測定法

– 301 –

(1) 等高線偏角から見た建物軸の特徴

平泉全域では研究対象の建物遺構 204 棟のうち、等高線偏角が 5° 未満の建物は 35 棟 (17.2%)、 5° 以上 10° 未満の建物は 35 棟 (17.2%) にとどまり、平泉全域では建物は地形との平行性が低い (表 2 参照)。

平泉の市街地は西から東に傾斜しているものの、その斜度は多数の建物軸方向を左右する要因にはなりえないほどの緩やかさである。

地区別にみると、偏角 5° 未満の建物の割合は、無量光院周辺が最も高く (IV地区 27.3% 図 8)、次いで毛越寺周辺 (I地区 19% 図 9)、泉屋遺跡周辺 (II地区 17.9% 図 10) と続く。中でもIV地区は 5° 未満の建物が 3 棟 (27%)、 5° 以上 10° 未満の建物が 11 棟中 7 棟 (63.6%) であり、無量光院周辺では建物と地形の平行性が高い。

また、III地区の花立廃寺で検出された建物も同様に地形との平行性が高く、それぞれ 1.8° 、 10.29° であった。等高線偏角が小さい理由は、花立廃寺のすぐ西側には金鶏山があり、山腹の斜度によって立地点の地形に沿って配置されたためである (図 11)。

(2) 視線偏角から見た建物軸の特徴

視線偏角 10° 未満の建物が検出されたのは無量光院周辺 (IV地区 図 8) および柳之御所跡 (V地区 図 8、図 12) であった。無量光院周辺 (IV地区) のみ偏角 5° 未満の建物が検出され (63.6%)、他の地区と比べて周辺山頂と建物軸方向との一致性が高い。

但し平泉全域で視線偏角が 5° 未満の建物は 7 棟 (3.4%)、 10° 未満の建物は 10 棟 (4.9%) にとどまる (表 2 参照)。

これは中世平泉の市街地の大半において、山頂が必ずしも建物軸方向の要因ではなかったことを示唆している。

(3) 道路偏角から見た建物軸の特徴

平泉全域で道路偏角が 5° 未満の建物は 70 棟 (34.3%)、 5° 以上 10° 未満の建物は 48 棟 (23.5%) である (表 2 参照)。

偏角 5° 未満の建物の割合は、毛越寺周辺が最も高く (I地区 45.2% 図 13)、次いで柳之御所跡 (V地区 39.5% 図 14)、泉屋遺跡周辺 (II地区 26.9% 図 15) と続く。

特徴的なのはV地区の柳之御所二重堀内中心部である。前稿¹²⁾で「複数の道路軸ビスタ内に山頂・峠が存在し、特に正方位軸は観音山又は東岳峠に、また第2軸は観音山に集中する点が顕著である」との知見を得ていることから、本稿で柳之御所内の建物軸方向と道路軸方向との関係性が認められたことは、柳之御所内の道路ならびに建物は東側山稜を望むような配置であった可能性を示唆している (図 14)。

その一方で、志羅山B地区内 (II地区) では建物遺構が道

図 12 柳之御所から見た高館方向の景観

図 8 等高線偏角および視線偏角抽出結果 (無量光院周辺 IV地区、柳之御所跡 V地区)

図 9 等高線偏角および視線偏角抽出結果 (毛越寺周辺 I地区)

図 10 等高線偏角および視線偏角抽出結果 (志羅山遺跡 B, C地区・泉屋遺跡周辺 II地区)

図 11 等高線偏角および視線偏角抽出結果 (III地区)

路軸から 5m を超えて検出された場合、道路軸との平行性より正方位軸または立地点の地形に沿った建物が検出され(図 15 破線円)、平泉の中でも建物軸方向への影響要因が一定でないランダムな建物配置が存在した。

以上より、建物軸方向の特徴を示す 4 指標のうち、道路が最も建物軸方向と平行性を保っていたものの、その偏角が 5° 未満の建物は全体の 34.3% に留まり、地区によってばらつきがあった。

なお、表 2 のⅢ地区およびⅣ地区の道路偏角の統計が未記入なのは建物遺構から半径 400 尺以内に道路遺構が検出されておらず、道路偏角の抽出結果の統計をとることが不可能であったためである。

図 13 道路偏角および正方位偏角抽出結果(毛越寺周辺 I 地区)

(4) 正方位偏角から見た建物軸の特徴

平泉全域で等高線偏角が 5° 未満の建物は 47 棟 (23.0%)、5° 以上 10° 未満の建物は 52 棟 (25.5%) であり、道路偏角に次いで建物軸方向に対する平行関係が保たれていた(表 2 参照)。

毛越寺周辺の偏角 5° 未満の建物の割合が最も高く(I 地区 42.9% 図 13)、柳之御所跡(V 地区 22.4% 図 14)、泉屋遺跡周辺(Ⅱ地区 16.4% 図 15)と続く。

特に、V 地区の中心部とされる大型建物は中央の寝殿造りが東西棟を主とするといわれていることにに対し、南北棟を主としていた。

図 14 道路偏角および正方位偏角抽出結果(無量光院周辺Ⅳ地区、柳之御所跡Ⅴ地区)

図 15 道路偏角および正方位偏角抽出結果(志羅山遺跡・泉屋遺跡 Ⅱ地区)

図 16 道路偏角および正方位偏角(Ⅲ地区)

表 2 4 指標から見た各地区の建物軸特徴

対象地区名	対象建物棟数(棟)	(1) 等高線偏角			(2) 視線偏角			(3) 道路偏角			(4) 正方位偏角		
		5° 未満			5° 以上 10° 未満			5° 未満			5° 以上 10° 未満		
		5° 未満	5° 以上 10° 未満	10° 以上	5° 未満	5° 以上 10° 未満	10° 以上	5° 未満	5° 以上 10° 未満	10° 以上	5° 未満	5° 以上 10° 未満	10° 以上
I 地区 (毛越寺周辺)	42	8 棟 19.0 %	7 棟 16.7 %	27 棟 64.3 %	0 棟 0.0 %	0 棟 0.0 %	42 棟 100.0 %	19 棟 45.2 %	12 棟 28.6 %	11 棟 26.2 %	18 棟 42.9 %	12 棟 28.6 %	12 棟 28.6 %
Ⅱ地区 (泉屋遺跡周辺)	67	12 棟 17.9 %	11 棟 16.4 %	44 棟 65.7 %	0 棟 0.0 %	0 棟 0.0 %	67 棟 100.0 %	18 棟 26.9 %	8 棟 11.9 %	41 棟 61.2 %	11 棟 16.4 %	14 棟 20.9 %	42 棟 62.7 %
Ⅲ地区 (花立廃寺周辺)	8	1 棟 12.5 %	0 棟 0.0 %	7 棟 87.5 %	0 棟 0.0 %	0 棟 0.0 %	8 棟 100.0 %	— 棟 — %	— 棟 — %	— 棟 — %	1 棟 12.5 %	0 棟 0.0 %	7 棟 87.5 %
Ⅳ地区 (無量光院周辺)	11	3 棟 27.3 %	7 棟 63.6 %	1 棟 9.1 %	7 棟 63.6 %	1 棟 9.1 %	3 棟 27.3 %	— 棟 — %	— 棟 — %	— 棟 — %	0 棟 0.0 %	4 棟 36.4 %	7 棟 63.6 %
V 地区 (柳之御所跡)	76	11 棟 14.5 %	10 棟 13.2 %	55 棟 72.4 %	0 棟 0.0 %	2 棟 2.6 %	74 棟 97.4 %	30 棟 39.5 %	28 棟 36.8 %	18 棟 23.7 %	17 棟 22.4 %	22 棟 28.9 %	37 棟 48.7 %
計	204	35 棟 17.2 %	35 棟 17.2 %	134 棟 65.7 %	7 棟 3.4 %	3 棟 1.5 %	194 棟 95.1 %	70 棟 34.3 %	48 棟 23.5 %	70 棟 34.3 %	47 棟 23.0 %	52 棟 25.5 %	105 棟 51.5 %

※該当数は該当する棟数を、() 内の割合は各地区で対象とした建物棟数に対する建物該当数の割合を表している。

※Ⅳ地区では 8 棟の建物遺構半径 400 尺以内に道路遺構が検出されなかったため、(3) 道路偏角は伽羅御所で検出された 3 棟の該当数のみ示す。3-(3) 項参照

その一方で、花立廃寺周辺（Ⅲ地区 図 16）、無量光院周辺（Ⅳ地区）では正方位偏角 5°未満の建物が少なく、建物が正南北軸に対し東偏して建設されていたことは、両地区の建物軸決定要因は正方位軸によらないことを示唆している。

なおⅠ地区、Ⅱ地区およびⅤ地区から、上記 4 指標の偏角いずれも大きな値の建物が数棟検出された。これらの建物は川に近接して建っている例（図 8 から 10、図 13 から 15 実線円）、あるいは近くに大規模の建物遺構が検出されているものの当該建物の面積は小さく、建替えが反復する例がある。先の例については水域の位置または流形と少なからず関連していたことが推測できる¹³⁾。また、後の例については大きな建物の付属屋など、居住用途以外の建物の可能性がある。

4. 属地性と中央性

2 (3) 節で前述したように、建物軸に関する 4 指標のうち地形及び周辺景観などは建物近景の地形と建物軸方向との関係から市街地形態の「属地性」を、また正方位や道路との平行性などは条坊制都市における建物配置との共通性からその「中央性」を表象するものとみなす。

属地性と中央性の 2 つの視点から平泉市街地を整理すると、属地性・中央性の両方が抽出されたのは柳之御所周辺のみであり、他地域はどちらか一方しか抽出されなかった。（表 3、図 17、18）。

（1）属地性から見た中世平泉市街地の特徴

無量光院周辺（Ⅳ地区 図 8）は属地性が高く、等高線偏角、視線偏角共に 0°以上 10°未満の条件を満たす建物は 6 棟（54.5%）あり、うち 1 棟は両偏角とも 5°未満であった。

このことから、浄土空間を具現化した寺院であるが故の東向きの建物配置と、更に中島からの視線が、春秋分日没の地点^{注 9)}となる金鶏山山頂—無量光院本堂を一直線になるよう配置されたとする多くの先行研究^{14)、15)、16)}の指摘を追認できる（図 19）。

研究対象の建物遺構 204 棟のうち、属地性の指標となる等高線偏角および視線偏角が共に 5°未満であった建物は 1 棟（0.5%）のみであり、0°以上 10°未満の建物は 15 棟（7.4%）であったことから、平泉を全体的にみると、建物周辺の地形・景観と建物軸方向との関係性が小さい（属地性の低い）土地である。

（2）中央性から見た中世平泉市街地の特徴

毛越寺周辺（Ⅰ地区）では、両偏角が 5°未満のものは 8 棟（19%）、0°以上 10°未満のものは 21 棟（50%）であった。この地区で検出された道路軸はほぼ正方位であることから、建物の半数が道路に沿って正方位軸で建設された、中央性の高い地区である。

また、泉屋遺跡周辺（Ⅱ地区）では両偏角が共に 5°未満の建物は 6 棟（9.0%）、0°以上 10°未満の条件を満たすものは 25 棟（37.3%）であった。中でも志羅山 C 地区はⅡ地区内の他の遺跡と比べ、中央性が高い。また泉屋遺跡は東西棟の建物（6 棟）が多く（図 15 一点鎖線円）、両偏角が 0°以上 10°未満の建物は 11 棟であり、泉屋遺跡の対象建物遺構 17 棟の 65%を占めた。

柳之御所（Ⅴ地区）は両偏角が 5°未満のものは 6 棟（7.9%）、0°以上 10°未満の条件を満たす建物は 30 棟（39.5%）であった。柳之御所は二重堀の内外で特徴に差異があった。

二重堀内の建物は道路偏角、正方位偏角共に 0°以上 10°未満の条

表 3 属地性と中央性から見た各地区の特徴

対象地区名	対象建物棟数 (棟)	属地性		中央性	
		両偏角 5°未満	両偏角 10°未満	両偏角 5°未満	両偏角 10°未満
Ⅰ地区 (毛越寺周辺)	42	0 棟 0.0 %	0 棟 0.0 %	8 棟 19.0 %	21 棟 50.0 %
Ⅱ地区 (泉屋遺跡周辺)	67	0 棟 0.0 %	0 棟 0.0 %	6 棟 9.0 %	25 棟 37.3 %
Ⅲ地区 (花立廃寺周辺)	8	0 棟 0.0 %	0 棟 0.0 %	0 棟 0.0 %	0 棟 0.0 %
Ⅳ地区 (無量光院周辺)	11	1 棟 9.1 %	6 棟 54.5 %	0 棟 0.0 %	0 棟 0.0 %
Ⅴ地区 (柳之御所跡)	76	0 棟 0.0 %	9 棟 11.8 %	6 棟 7.9 %	30 棟 39.5 %
計	204	1 棟 0.5 %	14 棟 6.9 %	20 棟 9.8 %	76 棟 37.3 %

図 17 属地性と中央性からみた各地区の特徴

図 18 属地性・中央性の地域

図 19 無量光院対岸から見た金鶏山への日没
(撮影：2006.08.31)

件を満たす建物は19棟であり堀内建物検出数41棟のうち39.5%を占め、10°未満の建物は6棟（14.6%）であった。中央性が高い建物は堀内道路の南に多く（図14 一点鎖線円）、道路以北および堀外の建物は中央性が低い。

一方、志羅山遺跡B地区では毛越寺から続く東西路の幅員が狭まり、正方位軸の他東偏する2種類の道路軸が存在することも、I地区と比べ中央性が重視されていないことを示している。

つまりII地区は地区内でも特徴にばらつきがあり、I地区と比較して、属地性に差はないものの中央性は低い地区である。

研究対象の建物遺構204棟のうち、中央性を示す道路偏角および正方位偏角が共に5°未満であった建物は20棟（9.8%）であり、両偏角10°未満の建物は96棟（47.1%）であったことより、平泉は必ずしも中央性の強い建物配置ではなかった。

5. 結論

本稿で設定した4種の指標により中世平泉の建物立地と建物軸の特徴について以下の知見が得られた。

- 1) 毛越寺周辺では正方位の道路区画および建物配置が検出されていることから、中央性傾向の都市形態を想定できる。ただし、毛越寺付近で約30mあった東西路の幅員は一定でなく、柳之御所の一部を除く他の市街地の大半では、道路配置および建物配置は必ずしも中央性を認めることが出来ない。
- 2) 柳之御所は堀内道路南部の一部に中央性の強い場所が検出されたものの、御所全体の建物軸からみると、その周辺を含めて条坊制のような都市構造は想定し得ない。
- 3) 無量光院の建物軸方向が金鶏山山頂と一致する。その理由として、中島からみた無量光院本堂—金鶏山山頂が一直線上になる建物配置は、日没が金鶏山に拝むことが当時の西方極楽浄土の思想と合致したものと考えられる。但し、平泉全体としてみると建物軸線上に周辺山頂があるものは無量光院と高館の麓の一部の建物が留まることから、建物軸方向が山稜の位置に左右された可能性は低く、市街地の大半では属地性を認めることができない。

以上の諸知見に基づけば、中世平泉の市街地は正方位を基準とした平安京に類似する都市基盤整備を行った地区と中央性にそぐわない地区とがあり、その都市整備が必ずしも画一的なものでなかったことを示唆している。

つまり中世都市平泉の形成に際して奥州藤原氏は仏教都市の具現化を目指しつつ、一族の施設配置およびその周辺道路整備の面では手を加えたものの、藤原氏の平泉入府以前から存在した他の建築物については、藤原氏の支配力が及ぶことはなく、建主の自由度が高かったものと考察できる。

謝辞

本稿の執筆に際し、発掘調査報告ほか多くの資料のご協力および助言、ご指摘など、ご多忙の中多くの方々のご指導ご鞭撻を賜りました。千葉信胤主事をはじめ平泉郷土館の皆様、佐藤嘉広氏をはじめ岩手県教育委員会の皆様。記して謝意を表します。

注

- 注1) 中世平泉に存在した正方位軸とは異なる軸方向を総称して「第2軸」とする。北から東に11～15°振れており、主に白山社以東・以北に存在する。
- 注2) 建物遺構の建設年代は、遺構の検出状況により年代の特定に限界があるため、本稿は奥州藤原氏が統治した12世紀に建設された可能性がある全ての建物を対象とし、時系列での考察行わない。
- 注3) GARMIN 製 イートレックス ビスタ 日本語版
- 注4) CASIO 製 QV-4000
- 注5) GPS 付属カメラの精度実験（2005年6～8月）を4回行った結果、撮影方位角の誤差1～3°は、中世の測量技術水準を考慮して、許容範囲内と見なした。
- 注6) 世界測地系（ITRF:国際地球基準座標系）に基づく経緯度。
- 注7) 本稿は建物正面の方向と各偏角を抽出する対象となる4つの要素との平行性に着目し建物軸方向の特徴を把握することから、当時の多くの建物の正面が梁間方向であったことを考慮し、「建物軸」を梁間柱列に限定した。
- 注8) 本稿は偏角の整理にあたり±5°の幅を次の5項目より設定した。①GPS 付属デジタルカメラの撮影方位角の誤差が1～3°である。②全ての柱穴が一直線上に配置されていない柱列があり、一部の建物で柱穴位置を結ぶ想定線が発掘調査報告書の値より3～4°の誤差が生じる場合がある。③平泉から検出されて建物は必ずしも梁間柱列線と桁行柱列線のなす角が90°ではなく、90±1～4°の建物が数棟検出されている。④「視線偏角」では心理学分野において視野を論じる時に用いられる中心視野（視線から片側10°以内）と「周辺視野」（同じく10°以上）を抛り所とし、本稿は片側5°以内を許容範囲とした。
- 注9) 浄土思想に基づき、先行研究では中島から見た無量光院本堂—金鶏山山頂—日没が一直線上に並ぶのは春秋分の日と述べられているが、筆者は2006年8月31日に景観記録調査を行い、その配置になるのは4月及び8月末であることを確認した

参考文献

- 1) 富島善幸：平泉の都市空間と仏教建築，日本考古学協会2001年盛岡大会研究発表資料集「都市・平泉—成立とその構成—」，pp.35～44，日本考古学協会，2001.10
- 2) 磯野綾：中世平泉の市街地形成に関する一考察，日本建築学会論文集，pp.471-478，2008.02
- 3) 藤島玄治朗：平泉建築文化研究，吉川弘文館，1995
- 4) 山田安彦：古代の方位信仰と地域計画，古今書院，1993
- 5) 高橋康夫ら：図集日本都市史，東京大学出版会，1993
- 6) 山本明：中世都市・鎌倉の都市構造に関する一考察，日本建築学会大会学術講演梗概集，F-1 分冊，pp.313～314，2001
- 7) 山田安彦：方位読み解き辞典，柏書房，2001.
- 8) 前川佳代：平泉の苑池—都市平泉の多元性—，平泉文化研究年報第1号，pp.59～70，2001.3
- 9) 前掲 参考文献4)
- 10) 清水擴：平泉の建築にみる中央性と地方性，日本建築学会大会パネルディスカッション資料「平泉建築文化にみる中央性と地方性」，社団法人日本建築学会，pp.3～11，2006.9
- 11) 前掲 参考文献1)
- 12) 前掲 参考文献2)
- 13) 鳥山愛子：12世紀柳之御所遺跡における掘立柱建物の研究，平泉文化研究年報第7号，pp.45～56，岩手県教育委員会，2007.3
- 14) 前掲 参考文献3)
- 15) 前掲 参考文献8)
- 16) 入間田宣夫：都市平泉の遺産，株式会社山川出版，2003

（2008年6月10日原稿受理，2008年9月24日採用決定）